

重要文化的景観の選定等

《重要文化的景観の新選定》 1件

1 波佐見中尾皿山と鬼木棚田の文化的景観【長崎県東彼杵郡波佐見町】

波佐見町は、長崎県中央北東部の県境、山間部に位置し、近世に大村藩が重要産業とした窯業と稻作を現在も主産業とする。当該文化的景観は、町東部南端で隣り合う窯業集落である中尾郷と農業集落である鬼木郷から成る。

国内の磁器生産は近世初頭に肥前で始まり、皿山と呼ばれる窯業専業集落が、磁器の原料となる陶石と薪を生む山林を背景に、陶石を唐臼で碎くための川と登り窯に適した急斜面をもつ谷に開かれた。近世初頭に集落が開かれた中尾皿山では18世紀には巨大な登り窯で安価な磁器を大量生産し、国内に普及させた。近代以降は技術の進展等に伴い、窯や職住一体の住まいを変遷させつつ窯業を発展させてきた。

鬼木郷は、山中の緩傾斜地にあり、近世初期には水田耕作がなされ、近世後半以降に中尾皿山の発展に合わせて棚田を広げたとされる。棚田は3本の河川が流れ合流する谷に広がり、田越し灌漑等の伝統的な水利の仕組みや石積みを集落全体としてよく残す。

中尾皿山は近代には都市的な様相を呈し、鬼木郷から中尾郷へ峠を越えて米や農作物・薪炭・梶包材となる藁製品の販売や下肥の購入、高度経済成長期には農閑期に窯業の手伝い等も行われた。

当該文化的景観は、肥前において磁器生産及び窯元をはじめとした住まいの変遷と、伝統的な水利の仕組みを持つ棚田と農家の住まいのあり方を、集落全体として伝えることに加え、両集落が窯業と農業を主産業とする地域の発展のあり方を伝え、貴重である。

《重要文化的景観の追加選定》 1件

1 アイヌの伝統と近代開拓による沙流川流域の文化的景観【北海道沙流郡平取町】

日高山脈西麓に広がる自然環境を基盤とし、先史時代以降の人の営み、アイヌ文化の諸要素、開拓期以降の農林業に伴う土地利用によって重層的に形成されてきたことがアイヌ民族のイウォロという伝統的な生活領域を通して理解することができる貴重な景観。